

明海大学不動産学部

不動産の不思議

学生たちの視点と発見

第237回

【学生の目】

小さい頃、「子供は外で遊べ」とよく言われた。子供にとって外は、鬼ごっこやかくれんぼ、サッカーや野球など、いろいろな楽しみも怒られず、思っ存分に声を出し、身体を動かせる自由な場所だった。

公園の広場は子供が元気に走り回り、鬼ごっこやサッカーをする樂園のはずだが、そこは閉鎖されていた。理由は「ボールが広場のフェンスを越えたり、利用の際の騒音がなくならないため」だ。子供が騒音を気にせず遊べる広場がなぜできないのか。



佐藤 真誠
不動産学部3年

閉ざされた公園

子供が遊べるようにしたい

少子高齢社会を迎えた今、子供を増やすことは国中の課題で、子育てがしやすい環境を整えることは重要課題だ。「私権は、公共の福祉に適合しなければならぬ」（民法1条1項）が、安心して子育てすることが公共の福祉とすれば、写真の公園広場はこれに反する。閉ざされた広場は、私権を強く主張する住民や真の公共の福祉を考えない行政ほかから招いた結果だと思う。

少子高齢社会を迎えた今、子供を増やすことは国中の課題で、子育てがしやすい環境を整えることは重要課題だ。「私権は、公共の福祉に適合しなければならぬ」（民法1条1項）が、安心して子育てすることが公共の福祉とすれば、写真の公園広場はこれに反する。閉ざされた広場は、私権を強く主張する住民や真の公共の福祉を考えない行政ほかから招いた結果だと思う。

外で遊べない子供は家で遊ぶ。子供が外遊びをする時間が減少したと92%の保護者が回答した調査もある。家で遊ぶこと自体は悪いことではなく、親の目の届く所で遊べるなどのメリットもある。しかし、大人が子供の遊び場を消した結果で、コミュニケーションが苦手な子供を増やす原因となっている。放課後の時間帯に誰一人遊んでいない公園を想像してほしい。とても暗く街全体がさびしく思えてしまう。解決策はあると思う。まず、住民の受容の目安を設定する。小学校や幼稚園の程度のもうやさなほど、一定の騒音レベルを基準にする。基準を上回るレベルが連続するときは警告の音声を流し、レベルダウンを促す。それでも治らない場合は周辺住民が直接クレームすることを確認してはどうか。次に、基準を上回ることが多い広場では遮音壁を設置する。幹線道路では24時間騒音が発生するが、改良型の遮音壁を設置して住宅と共存している（西川美波「不動産の不思議第220回」18年2月6日号）。さらに時間を限定する。公園は1日中うるさいわけではなく、曜日や季節でも異なる。騒音やボールの影響が大き

【教員のコメント】
子育ての負担を親だけに負わせる社会は少子に留まらず階層社会を来す。人口減少時代を迎え、都市生活で生じる不経済を社会全体でどのように受容するか規範の再構築が必要で、公共施設を公共の福祉のために取り戻すことはその第一原則だ。



閉ざされたままの公園広場